

健康文化

## それぞれの海

高田 健三

この8月上旬の新聞に、渥美半島のとある浜辺に流れ着いている一つの椰子の実が見つかったという記事が載った。それは8月の3日、所は半島先端、島崎藤村の詩「椰子の実」の舞台と言われる恋路ヶ浜近くの海岸であったという。たった一つとは言え、この椰子の実は、渥美町観光協会の人達にとっては、待ちに待った夢の実現であったに違いない。協会は、藤村の詩のロマンを再現しようと、1988年以來これまでに、1589ヶにのぼる椰子の実を、沖縄県石垣島から流し続けてきたのである。フィリピン近海に発し、南の島々を巡り来て、日本列島沿いに南から北へ流れる黒潮(日本海流)が、いつかきっと運んでくると信じていたのである。13年もの長きに渡って流し続けた協会の人達の情熱が、先の見えない荒んだ今の御時世の中にあって、人は未だ“夢”を失っていないという証を見せてくれた思いがする。協会の人達の喜びもさることながら、感慨ひとしおなのは、天国にいる島崎藤村その人ではないだろうか。嘗てロマン主義の詩人といわれ、新体詩の先駆者として活躍した藤村の思いが、今、実現したのである。

そもそも藤村の詩情を掻き立たせたのは柳田国男であるという。明治30年、22歳の大学生であった国男は、一ヶ月余り渥美半島伊良湖岬に夏の日を楽しんでいた時、砂浜に打ち上げられた船具などの漂着物の中に、椰子の実を見つけたことが三度あったという。その中には実が割れ、白い中身がむき出て無惨な姿になっているものもあって、遥かな旅路の果てを見る思いに胸を打たれたらしい。その光景は後に、壮大な民俗学を展開するインセンティブになったのであろう。

帰京した柳田からこの話を聞いた藤村は、名も知らぬ島に育った木の実の運命に大いに触発されたのか、早速に詩に表したのが、今日に歌い継がれている名作“椰子の実”の歌、

名も知らぬ遠き島より  
流れ寄る 椰子の実一つ  
ふるさとの岸を 離れて

なれはそも波に 幾月

である。千数百キロも隔たった遙か“遠き島”より流れ着いたのが、ただ一つであったことも、藤村の詩情の世界にぴったりである。これが五つも六つも、ごろごろ流れ着いたのでは、あの詩の情景にはそぐわない。もし彼ら二人が今に生きていれば、道を異にしたその後の人生の姿を語り合い、青春の頃を懐かしむことであろう。

私も何度か渥美半島を訪れたことがある。突端の伊良湖岬に立つと、南側の海岸線が、ゆるやかな弧を画いて東に延びる砂浜を一望することができる。今では土産物を商う店もあるが、明治の頃は、恐らく白砂青松の砂浜であったと思われる。浜に対する太平洋は見渡す限りの大海原で、水平線が丸みを帯びて見えてくる。恋路ヶ浜とは、いつ、誰がつけたのか知らないが、海は、見る者を、時にはロマンティックな世界に誘い、時にはメランコリックな気分させるものである。柳田をして、秀でた詩人といわせた藤村の心の奥を知る由もないが、明治以来今日まで歌い継がれているのは、椰子の実に込められた彼の詩情が人の心に共鳴を起すからなのである。

最近、友人のお嬢さんがメンバーの一員である木管五重奏団「レモンの会」の演奏会を聴くチャンスがあった。プログラムの一つ、“日本の歌”の中に、椰子の実が取り上げられていたのは偶然といおうか。哀愁を帯びたメロディーは、木管によく合う曲だということを改めて発見した。この夏の或る夕べのことであった。

浜辺というと、私の心の中には二つの対照的な砂浜の記憶が残っている。私の故郷は九州は福岡である。近くには、博多湾を抱きかかえるようにして海に延びる西戸崎の砂浜などがあって、子供の頃、よく親が連れて行ってくれた北九州の海岸の砂浜は、どこも、目に眩しい程の白さであった。中でも唐津に近い“虹の松原”は、正に白砂青松そのものの景色であった。

小学六年生の時、父の仕事の関係で東京の移った年の夏、従兄弟達と一緒に鎌倉の海に行ったことがあった。あの有名な由比ヶ浜ということで、子供心に胸躍らせていた。ところが着いてみて、ここがその浜だという砂浜は、一面灰色の砂で被われていたのである。人の多さにも驚いたが、砂の色には目を疑ったものである。それ以来今に至るも、日本の砂浜の色が気になって仕方がない。人間活動の拡大による海岸汚染の深刻化の上、護岸工事が進む中、自然を残す海岸線が姿を消していくのは淋しい限りである。白砂青松という島国日本の原風景は、もはや、絵の中にだけ残る世界なのかもしれない。

今年の夏は記録的な暑さであった。太陽が一杯の海は、若者達にとっては、

命のほとぼしる季節である。泳ぎにサーフィン、ヨットセーリングなど遊びを満喫したに違いない。最近、シュノーケルをつけて磯に潜ったり、スキューバダイビングで珊瑚礁を散歩するなど、マリンスポーツの世界も広がった。あの無重力状態のように動き回れる海底の世界は、たまらなく魅力的である。一度は経験してみたい気持ちに駆られるが、残念ながら、私はまったくの金槌なのである。

一時の賑わいも去り、若者達が砂浜に残したそれぞれの思い出の跡は、うたかたのように消え去り、潮騒だけを残して海は再び静かな表情を取り戻した。私にとって海は、やはり眺めるものなのである。茫洋とした海は、いつまで見ても飽きさせない。浜辺の磯の香に人はなぜか懐かしさを感じるのである。生命が誕生した海は、生ける物総ての故郷だからであろう。今流に言えば、海は“癒し系”なのである。だからこそ、浜辺は失恋に沈む若者の心を優しく包んでくれる。土屋花情作詩の“さくら貝の歌”は、

美(うるわ)しき 桜貝一つ  
去りゆける 君にささげん  
この貝は 去年(こぞ)の浜辺に  
われ一人 ひろいし貝よ

と心の中を歌う。誰の目にも美しい薄紅色のさくら貝に慕情を託して、あてもなくさすらうには、どこまでも続く砂浜が相応しい。

登山で賑わう山々は、秋ともなれば又、紅葉などで人出がある。一方、海は夏の日が終ると急に淋しくなるものだと思い巡らせていると、冬の海の景色が思い出された。

昨年の11月も末、木枯らしが冷たさを増してきた頃、急に思い立って新潟県水原町の瓢湖の白鳥を見ようと、家内と二人で出かけた。同時に、以前から歌などで気になっていた日本海の荒波も、ぼつぼつ見頃(?)ではないかと思い、佐渡にも足を伸ばすことにした。新潟港から水中翼船に乗ることにした。普通のフェリーでは2時間かかるところを1時間で行けると言うし、船も小型なので、荒波の感じを味わえるだろうと思ったからである。

丁度、雨交じりの風が吹き出し、海は白い波頭を立て始めた。水中翼船は、高速走行に移ると、船底が水面から浮き上がっているにも拘わらず、高い波頭が、ずしんずしんと船底を叩き、その衝撃が容赦なく足許から伝わってくるのは、なかなかのスリルであった。日本海の荒波を目で見、体で感ずることができたのは幸いであったと言うべきだろう。その船中で、家内と二人で思いついたのが、佐渡にまつわる芭蕉の句であった。なかなかその五・七・五の十七文

字が浮かばず、その時は、今、自分達が見ている目の前の景色のせい、 “荒海や 沖によこたう 佐渡ヶ島” などと、どこかおかしいと思いつつも、いい加減のことで落ち着いてしまった。

島の西側にある尖閣湾に立つと、コートも吹き千切れるような寒風と、刺々しい白波が飛沫を立てる日本海の荒々しさが迫ってきた。空の色も海の表情も、太平洋の海と違って心にしみ入るようなもの悲しさがある。承久の変(1221)の罪を問われ、この地に流され、22年に渡る流刑の生涯を閉じた順徳上皇の慟哭なのか、或いは又、70才を越した高齢の身で、7年の刑を島で送った世阿弥の望郷の思いが籠るのか。その夜泊まった相川の宿は、海際にあつて、窓から見下ろせる磯は、一晩中、日本海の荒波に叩かれ、喘ぐように音を立てていた。佐渡の冬は、人も岩も草木までもが、身を屈めて逆境に耐えているような風情を持っているのである。

宿の人に聞くと、12月から翌年の3月頃までは、海が荒れて寒く、本土から訪れる人も少なくなるという。北原白秋作詩の“砂山”は、

海は荒海

向こうは佐渡よ

すずめ啼け啼け もう日はくれた

みんな呼べ呼べ お星さま出たぞ

と歌う。その昔、有名無名の人達が、この島に流され、命果てた歴史も手伝うのか、本土から見た佐渡は淋しい島のように見えるのであろう。

帰宅後、暫くたってから、芭蕉の句のことを思い出して、物の本で確かめてみた。それは、

荒海や 佐渡によこたふ 天の川

であることが分かった。元禄二年(1689)七月六日の七夕前夜、直江津で泊まった折の句会で披露された句であるという。そこで気がついたのは、天の川といえは、初秋の季語ということである。初秋とはいえまだまだ暑く、芭蕉は暑さで体調を崩していたという。季節的に荒海とはしっくりこないと思い、手許にあった山本健吉著“奥の細道”(講談社)を開いてみると、出雲崎に立ち寄った折、指呼の間に見える佐渡ヶ島に、多くの流人達のことを思い出され、その歴史的回想の悲しさを強調する意味で、冒頭に“荒海や”とおいたのであると解説されていた。芭蕉の世界の、心の深さを改めて知らされた。やはり佐渡は荒海が似合う島なのである。(平成13年8月)

(名古屋大学名誉教授)